08

どうする！建築士
他の専門資格の場合

グラウンドデザインのない日本の専門資格制度

日本に、いわゆる「先生」といわれる職業はたくさんある。その多くが、国家が認める専門資格者である。しかし、情報社会の現代、消費者がやみくもに「センセイ」と呼ぶ時代ではないだろう。建築士以外の専門資格制度も揺れ動いている。ここでは、医師、教師、弁護士に絞って紹介したい。

国民の命の保障を放置した医師免許・専門医制度

伊藤隼也 | 写真家・医療ジャーナリスト

「プロフェッショナル」かっこいい響きだ！　世の中にそう呼ばれる職業がいくつあるかは知らないが、小生などは中学生くらいから、プロフェッショナルという響きに憧れ続け、自転車に始まり、手にするアイテムは何でも「プロ仕様」という4文字にひたすら反応し、高じて、それが現在の仕事に繋がったともいえる。

今、プロカメラマンと医療ジャーナリストと、この二つを名乗っているが、実際、標榜するのは勝手だが、何の因果か、ともに飯を食うのに極めて困難な仕事なので、個人の力量というか、まさしく「勝負の世界」と実感している。しかし、何といっても世間が憧れるプロの最高峰は医師免許や弁護士資格など少数精鋭の国家ライセンスで、小生のようなライセンス不要のプロとは、その権威は比べるべくもなく、インタビューなどに出かけても、時としてお医者さまから名刺一枚頂戴できぬのも当然である。

だが最近、建築士の耐震偽装問題だけでなく、どうも世間の権威あるプロの信頼は大きく揺らぎ始めているようだ。医療の世界も同様で、医療技術は日進月歩にもかかわらず、日本の医師免許には、更新制度もなければ、法的に定められた生涯教育制度もない。実は、医師各人が、どのような経験と実績があるのかさえ、お上は知らない。国家も資格を与えっ放し、医師も資格をもらいっ放しというのが現況だ。さらに、医師国家試験には技能試験がなくペーパーライセンスでどんな医療行為もできてしまう。要するに、自動車試験場で法規試験だけを通ったドライバーが、その日から道路を走ることが許されていたのだ。一応、免許取得後に研修は存在したが、義務ではなく、2年間の努力目標だった。一つしかない「命」を預ける患者にとっては信じがたい内容だ。その上、教育の内容も統一されておらず、あまりに旧態依然だということで、2004年4月から、やっと国が新医師臨床研修制度を導入し、内科など主な臨床分野で実地研修することを義務付けた。

医療ミス問題や、病気を診て患者を診ない医師が増えているなど、その多くは国家や職能団体が医師教育や質の管理を疎かにしてきたつけに他ならない。建築士問題と構図は一緒である。

例えば米国では、医学部は大学院大学になっており、一般大学卒業後や看護師などが社会経験を経た後に入学するシステムになっており、志があるものだけが入学するという。わが国のような偏差値重視の頭でっかち医学部とは一線を画している。当然、医学生時代から教育病院での実地研修が最重要視されており、日本にはない医学部の評価や教官の資質も第三者の手でコントロールされている。

さらに重要なのは、病気を患う患者にとって信頼の響きである「専門医」制度も、わが国よりはるかにまともに機能している点だ。医療ミス事件などですでに明らかなように、「専門医」といえども実力を伴わない事実が、ここ数年のマスコミ報道で明らかになった。

報道されたケースが特殊なのではなく、ほとんどの専門医が厳しい試験もない見せかけの「プロフェッショナル」だったのだ。心臓血管外科専門医でありながら、ほとんど手術をしたことがなく、実力もない医師がたくさんいる実態が社会にばれた？！

先日もデータが報道されたが、症例数の多い病院とそうでない病院では死亡率が2倍も違う事実。現在、外科関連の学会などはこのような問題で大きく揺れているが、一日も早く欧米並みの厳しさを求めるのは患者にとって当然の期待である。

米国では、心臓外科専門医になるためには医師免許取得後、一般外科医として最低5年間働き、さらに心臓外科のスペシャリストとなるためには、専門分野での研修を2年間以上受けなければならない。優秀な脳・心臓外科専門医の場合など、年収は5,000万円を越え、一億円プレイヤーも存在する。チャンスは平等に与え、努力した人のみがビッグチャンスを得られる制度だ。

米国の場合は、経済的な保障が専門性を高める動機付けと言われているが、それだけではなく、教育的視点からもその人数を厳しく制限している。

現在、日本には心臓外科専門医が数千人いると言われているが、欧米やアメリカは数百人、いずれにしても一桁違う現状だ。厳しい規制と国民の信頼や社会的要求、徹底した情報公開や厳格な罰則規定が専門医の質を高め、医師は誇りを持ち、さらなる専門性の向上に向けて自己研鑽しているのである。

まさに選ばれし者だけが「プロフェッショナル」となる。振り返ってわが国の専門家はどうだろうか？　少なくとも国民の命や安全に関連する領域において、国家はもちろん、職能団体自らプロフェッショナルという高い専門性を維持するためにあらゆる努力が社会から求められているのは間違いない。

医療のグローバルなスタンダードは透明性と説明責任といわれて久しいが、建築士にとっても同様ではないではないだろうか。「プロフェッショナル」という言葉の心地良い響きを守るのは、一人ひとりの専門家の矜持であるのは間違いないだろう。

いとう・しゅんや | 1982年よりフリーカメラマン。1994年、父親の医療事故を機に医療問題に取り組む。2000年2月、医師、弁護士、医療システム研究者らと医療情報研究所設立。「SHUNYA-ITO.TV」http://www.shunya-ito.tv/

転載・二次使用禁止